

Japan Shipbuilding Digest

No.84

トピックス

大島造船所

Oshima Shipbuilding

2026年最初の命名引渡式を実施

1月7日、2026年最初の命名引渡式を大島工場にて実施しました。

お引き渡した船は「Minerva Dry Inc.」様の「SIKAMIA」です。

今回は船主様のご配慮により、建造に携わっている当社の入社2年目の社員2名が「本船命名」と「シャンパン割り」という重要な役割を担わせていただきました。



式典は滞りなく執り行われ、関係者が見守る中、「SIKAMIA」は無事出航し、当社にとっても幸先良い2026年の船出となりました。

役割を終えた2名は、「普段は部材単位でしか船を見ることがないため、それらがひとつの船となり出航していくところは感動的で、今後も船造りを頑張ろうと思った」、「普段パイプを作っているが、自分の毎日の作業が船の建造に重要だと再認識できた」と笑顔で感想を述べ、2026年も明るく前向きに、仕事に取り組む姿勢を示しました。

発行日: 2026(令和7)年3月19日

発行: 一般社団法人日本造船工業会



「SIKAMIA」は、当社1,076隻目の建造船で、建造1,100隻の達成も目前となっています。

名村造船所

Namura Shipbuilding

【1】佐賀県との包括連携協定



【(左)名村社長 (右)山口佐賀県知事】

(株)名村造船所と佐賀県は、相互に連携を図り、協働による取組みを推進することにより、佐賀県らしい地域社会を創造していくことを目的として、2025年12月18日に包括連携協定を締結いたしました。本協定では、災害発生時の支援、産業人材の確保および育成、海洋環境対策やカーボンニュートラル社会の推進、少子化対策、多文化共生の促進、公の施設における交流人口の拡大、スポーツ振興など、幅広い分野において佐賀県と連携・協力することとしています。当社は、佐賀県伊万里市に事業拠点を置く企業として、長年にわたり地域の皆さまに支えられながら事業活動を続けてまいりました。

今回の協定締結を機に、企業理念である「存在感」をより一層体現するとともに、佐賀県との連携をより深めながら、サステナビリティ・ESG施

策を更に推進し、持続可能で活力ある地域社会の実現に向けて、佐賀県全体の地域課題の解決や魅力向上に貢献してまいります。

佐賀県との連携事項

- 1 災害発生時の支援に関すること
- 2 産業人材の確保及び育成に関すること
- 3 海洋環境対策及びカーボンニュートラル社会の推進に関すること
- 4 少子化対策に関すること
- 5 多文化共生の推進に関すること
- 6 公の施設における交流人口拡大に関すること
- 7 スポーツの振興に関すること
- 8 その他
佐賀県らしい地域社会の創造に関すること

【2】「いまりっくらんど」開設

伊万里市では、(株)名村造船所が行った寄付を活用され、伊万里市民センター(佐賀県伊万里市)内に、未就学児向け屋内遊び場「いまりっくらんど」を開設されました。「いまりっくらんど」は、未来を担う子どもたちが、暑い日も雨の日も安心して思いっきり遊べる場所であり、さまざまなことを学び、夢を育む成長の場として、また子育て世代の保護者同士の交流の場として、地域の温かな想いに支えられながら、かけがえのない存在となることが期待されており、多くの方々にご利用いただいております。また、施設内には、船の形をした滑り台をはじめとする遊具が設置されるなど、小さなころから船に親しみ、海やものづくりへの関心を自然と育むことができるよう工夫されています。

当社は、今後も伊万里市で事業を営む企業として、経営理念である「存在感」のもと、伊万里市との連携をさらに深め、ESG 施策の推進とともに、地域社会の発展と持続可能なまちづくりに貢献してまいります。



【いまりっくらんど全景イメージ】



【遊具で遊ぶ子どもたちの様子】

常石造船

Tsuneishi Shipbuilding

常石造船のフィリピン拠点、世界初のメタノール二元燃料

KAMSARMAX を竣工

—フィリピン共和国大統領 ご臨席の命名式を挙行—



【メタノール二元燃料 KAMSARMAX(BRAVE PIONEER(ブレイブ・パイオニア))】

常石造船株式会社(本社:広島県福山市、代表者:代表取締役社長執行役員 奥村幸生)は、フィリピンの造船拠点である TSUNEISHI HEAVY INDUSTRIES (CEBU), Inc.(以下、THI)において、世界初となるメタノール燃料ばら積み貨物船 KAMSARMAX を、2026年1月15日に竣工、引渡しました。また命名式にて、フィリピン共和国フェルディナンド・マルコス大統領により「BRAVE PIONEER(ブレイブ・パイオニア)」と命名戴きました。

また命名式においてマルコス大統領は、次のように述べました。

「本日、世界初のメタノール二元燃料 KAMSARMAX 型ばら積み貨物船の引き渡しを見届けるにあたり、私たちはフィリピン造船史における歴史的な節目を迎えています。

この成果は世界に向けて明確なメッセージを発しています。すなわち、フィリピンは低炭素で持続可能な海上輸送への世界的移行を主導する準備ができている、ということです。今日の機会は、単に一隻の船の就航を祝うだけではありません。進歩と革新を祝う場であり、何よりも、急速に変化する世界の挑戦に立ち向かうフィリピン人の力を祝う場でもあります。

この達成は、強固な国際的パートナーシップによって成し得ることの好例です。日本とフィリピン、常石グループと Aboitiz Group*の協働により、先進的な船舶設計、熟練したフィリピン人労働力、そして強固な国内製造基盤が結びつきました。

このプロジェクトは二国間協力の産物であると同時に、非常に重要な点として、フィリピン人の職人技、創意工夫、競争力を示すものでもあります。「フィリピンでつくられたもの」は、世界最高水準のものと同肩を並べられるのだということを、改めて証明しています。」(常石造船社)

*合併パートナーである Aboitiz Group の協力のもと、常石造船はセブ島にて THI を立ち上げ造船事業を継続している。



【ご臨席いただいたフィリピン共和国フェルディナンド・マルコス大統領】

本船は、海事業界の脱炭素化を目的に、環境負荷の大幅な軽減を目指して設計しています。メタノールを燃料として使用することで、重油と比較して窒素酸化物(NOx)を最大約 80%、硫黄酸化物(SOx)を最大 99%、二酸化炭素(CO₂)を最大約 10%削減することが可能です。さらに、グリーンメタノールを採用することで、船舶運航における脱炭素化の推進に寄与します。

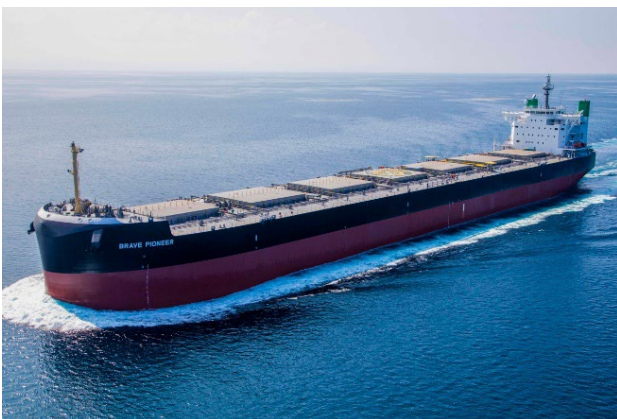
この度、二元燃料船化した KAMSARMAX 型船は常石造船が開発し、400 隻を超える竣工実績を持つ主力船型です。浅喫水と同時にエアドラフトを抑える設計により、主要港の多くをカバーする汎用性を有し、ギニア共和国のカムサール港にも入港可能な全長 229 メートルの船型です。

〈常石造船 代表取締役社長執行役員 奥村 幸生のコメント〉

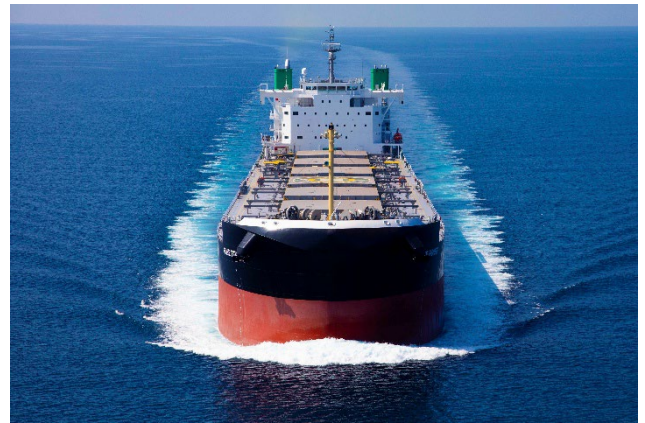
「このたび、世界初となるメタノール二元燃料 KAMSARMAX を、THI にて竣工、引渡しできたことを大変誇りに思います。本船の建造は、常石グループ造船セグメントが長年培ってきた設計力と建造技術、そしてグループ一体となった取り組みの成果です。

海事業界における脱炭素化は、今後ますます重要なテーマとなります。メタノール二元燃料船の建造を海外拠点で実現したことは、環境対応型船舶の量産体制構築に向けた大きな一歩であり、グローバルな顧客ニーズに柔軟かつ迅速に応える基盤強化につながるものと考えています。

常石グループ造船セグメントは今後も、安全・品質を最優先に、新燃料船舶の建造を通じて持続可能な社会の実現に貢献するとともに、海外拠点における人材育成と地域社会の発展にも引き続き取り組んでまいります。」



【メタノール二元燃料 KAMSARMAX「BRAVE PIONEER(ブレイブ・パイオニア)」】



【メタノール二元燃料 KAMSARMAX「BRAVE PIONEER(ブレイブ・パイオニア)」】

新来島サノヤス造船

Shin Kurushima Sanoyas Shipbuilding

体験乗船記

2025年6月27日に当社水島製造所にて引き渡した“ARIES MIZUKI”での体験乗船について紹介します。

本船は載貨重量 64,000トン型バルクキャリアであり、新共通構造規則(CSR-B&T)や NOx(窒素化合物)、SOx(硫黄化合物)排出などの環境規制に対応しつつ、クラス最高レベルの燃費性能を有した、最新のエコシップです。本船の運航、積地・揚地での荷役状況の見学等を含めた実航海を体験するとともに、乗組員とのコミュニケーションを通じた英会話能力の向上を目的として、乗船する機会を頂きました。

乗組員は総勢 21 名(すべてフィリピン国籍)で、彼らと共に当社水島製造所を出航してから玉渓港(韓国)でセメントの積荷後、釜山沖(韓国)にてバンカリングを行いました。そして Las Ventanas 港(チリ)にて揚荷を行い約2か月の乗船期間となりました。



【乗船中の航路】



【揚荷風景】



【航海中の日没風景】

長期的な海上生活を行う初めての経験となりましたが、急激な気候変動や波による揺れ、時刻・日付の前後など船上独自の環境への適応には苦勞しました。一方で入社2年と経験の浅い私にとって、船上で目にしたすべてが大きな学びとなり、拙い英語で乗組員とコミュニケーションをとりながらトラブルへ対処したことは何よりも貴重な経験となりました。また、休日はパソコンゲーム、カラオケ、映画鑑賞、誕生日パーティーなどの娯樂を通してフィリピンの文化に対しても理解を深めることができました。乗組員の明るい性格と社内の献身的なサポートもあり、2 か月間の体験乗船を有意義な形で終えることができました。



【船上でのカラオケ】



【下船時に乗組員と撮影した写真】

今回の体験乗船を通じて、船の使い勝手については何度も考えさせられることがありました。特に船内の通気性、機器や家具の使い勝手など、私が思っている以上に乗組員は、重要視していました。今までは、性能・工作性を改善する傾向がありましたが、顧客の声に寄り添ったより良い船を作っていくことが、改めて重要だと思いました。この体験乗船で得た学びと気づきを今後の設計業務に生かし、顧客や乗組員に信頼される船づくりに貢献していきたいと思ひます。

三菱重工業

Mitsubishi Heavy Industries

三菱造船 長崎本工場の執務エリアをリニューアル

三菱重工グループの三菱造船では、社員が安心して働き、最大限のパフォーマンスを発揮できる職場環境の整備を進めています。この取り組みの一環として、長崎本工場の執務エリアを全面的にリニューアルいたしました。

今回の改修では、業務効率の向上を目的に什器を刷新するとともに、オンラインでの打合せに適した Web 会議室を増設し、社内外との連携をより迅速かつ円滑に行える環境を整備しています。

さらに、社員同士が気軽に意見交換できるカフェスペースを新設し、組織内コミュニケーションの活性化を図りました。また、個人作業に集中したい場面に対応できるソロスペースも設け、落ち着いた環境で業務に取り組めるよう配慮しています。

三菱造船は、今後も働きやすさと働きがいの向上に向け、職場環境の改善を継続的に推進してまいります。



【新たな執務エリア】



【Web会議室】



【カフェスペース】



【子どもたちがクレーン操縦に挑戦】



【「造船所の大きさがよく分かった」との声も】

今治造船

Imabari Shipbuilding

今治造船、子どもたちに迫力の「造船VR体験」

今治造船は3月1日、香川県で開催された小・中学生向け職業体験イベント「Out of KidZania in かがわ」(主催:百十四銀行)にブースを出展し、子どもたちに「クレーン操縦士の仕事」をVR空間で体験していただきました。

巨大クレーンを操る「クレーン操縦士」と、操縦士に合図を送る「地上指示者」に分かれ、ブロックの組立・搭載に挑戦。互いに声をかけ合いながら作業を進める様子が多く見られ、緻密な操作やコミュニケーションの大切さを実感していただける体験となりました。

参加した子どもたちからは、「造船所のスケール感がよく分かった」「本当に操縦しているみたいで楽しかった」といった声が寄せられ、造船の迫力やクレーン操縦の魅力に触れていただくことができました。

当社は今後も、このようなイベントへの参加を通じて、子どもたちが将来の夢を描ききっかけづくりに積極的に取り組んでまいります。

ジャパン マリンユナイテッド *Japan Marine United*

砕氷型巡視船「そうや」引渡し

今回は2025年12月19日に引き渡した海上保安庁殿向け砕氷型巡視船「そうや」をご紹介します。気持ちの良い冬晴れの中、引渡式は行われました。

本船は、2代目「そうや」の代替として計画された海上保安庁最大の砕氷型巡視船です。

建造にあたり、JMUの技術研究所の氷海試験水槽を活用し、実海域を再現した試験を重ねており、氷海域でも問題なく船を進めることができます。

また、先代「そうや」には搭載されていなかった遠隔放水銃(消火活動や違法行為に対する警告に使用するもの)を新たに装備したほか、総合的な機能向上を図っています。

氷海域での安全を守る巡視船として、活躍を期待します！

▽「北海の守護神」その圧倒的スケールはこちら▽

- ・全長:約 92.4メートル(式典会場で間近に見るとさらに迫力満点！)
- ・幅 :16.4メートル
- ・総トン数:約 4,200トン(先代より大型化！)
- ・連続砕氷能力:厚さ1mの氷を割りながら進む力
- ・船型:氷海と平水、両方で性能を発揮するハイブリッド型(当社の氷海水槽でテストを重ねて開発！)

・特徴:

- ①海上保安庁最大級大型ヘリ「スーパーピューマ 225」の発着・燃料補給が可能な広い甲板(融雪装置付き)。
- ②船首には 30mm 機関砲を装備するほか、乗組員の安全を確保しながら遠隔で操作できる高圧放水銃も搭載
- ③コロナ禍の経験から、感染症患者の搬送を想定した隔離区画を新設。船内の居住区を通らず、外部甲板から直接アクセス可能。

当社 Instagram([@japan.marine.united.saiyo](#))ではもう少し詳しく、設備や船内を写真でご紹介しています。

写真:

